

中村仁一さん 去年（2020年）の年末でアウトの予定だったのに、3月下旬になってもまだ生きています。

入院して肺がんの治療をしていたら、私はとうに死んでいたと思いますよ。

近藤誠さん 抗がん剤を次々に打たれたり、コロナで誰にも会えずにね。

中村 そうですね。うちにいると一番自由がききますし、私が主人公で好きなこと言える。かかりつけ医にも、いやなことはとりあえず「いや」と言えるわけです。

入院していて「いや」と言ったら「出てくれ」って言われますからね。

妻がこの数カ月、一步も外に出ないで面倒をみてくれてるのもありがたいです。あんまりごちゃごちゃ言われたいから助かります。

近藤 そもそも「おかしいな」と思ったのはいつごろですか？

中村 去年の6月ですね。体はなんともないし食欲もあったんだけど、まわりから「やせたねえ」って言われて、体重を計ったら20kg近く減ってました。

あと、早足で歩くと息切れがね。勤め先の老人ホームが丘の上にあって、階段をのぼっていくんですが、急に息が苦しくなって、途中で何回も休むようになって。仕方ない、って8月にレントゲンを撮ったんです。

近藤 この画像ですね。

中村 ここ、肺が真っ白で。こっちは血液検査の結果で、腫瘍マーカーが高いから肺腺がんだろう。肝臓にも転移があるようだと。その後、検査はまったくしていません。

近藤 肺がんで肝転移があると、やっかいだ。

中村 がんは老化の一種で、私ももう80ですから「ついにきたか」って、そんなにどうってことなかったです。やるべきことは全部やってきた気もするし。

老人ホームで、がんも含めて自然死を700例以上見ましてね、自然に任せればラクに穏やかに死ねるよう、われわれの体ができていることも知っていますから。

2021年3月24日 京都の中村仁一さんのご自宅で

近藤誠著『最高の死に方』（宝島社新書）特別対談より抜粋